

円滑な遠隔授業に向けた教師支援

—コーディネータができること—

鈴木美穂・鈴木秀明・山口恵子

要旨

従来のコーディネータによる教師支援は、同一空間、同時双方向で提供することが多かったが、コロナ禍でそのような環境を提供することが難しくなった。しかし、遠隔授業経験が少ない授業担当講師にとって、教育機関が提供する ICT（情報通信技術）や情報のみでは十分とは言えないケースも多い。そこで、コーディネータは、この状況下での教師支援を検討し、自身の遠隔授業経験をもとに「授業運営に必要な最低限の知識と技術の提供」および「対話の場の提供」を行った。また、実際の支援では、支援内容に応じて対面での支援と遠隔での支援を組み合わせでいった。このような日々の小さな支援を積み重ねた結果、遠隔授業経験の少ない授業担当講師の抱える不安が軽減され、良好な学習環境を提供することが可能になった。コーディネータは、授業担当講師の経験や知識量、技術の習熟度に応じて、無理のない範囲で教師支援の内容や方法を取捨選択し提供することが求められる。

キーワード

遠隔授業、コーディネータ、教師支援、対話の場

1. はじめに

新型コロナウイルスの影響により、筆者らの 2020 年度の日本語プログラムは全面遠隔授業となった。春学期は受講者数減少のため、通常 4 レベルの開講が 2 レベルとなり、コーディネータら専任教員のみで遠隔授業を担当した。秋学期はオンライン交換留学プログラムが新たに開始され、3 レベルの開講となり、専任教員および非常勤講師（以下、授業担当講師）で遠隔授業を実施することになった。秋学期に初めて遠隔授業を行う授業担当講師には、指導法、教材作成、ICT 習得などの準備が求められ、教師支援が必要になった。

各教育機関からは、遠隔授業実施に向けて ICT や情報に関する教師支援が提供されたが、全体説明会やマニュアル配布など一方通行で一括対応が主なものだった。しかし、実際に授業が始まると、科目や授業担当講師によって様々な問題が生じるため、問題解決には双方向で個別対応の支援が必要となった。そこで、コーディネータが自身の遠隔授業経験に基づいて教師支援を検討し、支援の内容や方法を決定した。本実践では、コーディネータが実施した支援の内容や方法とともに、授業担当講師の振り返りを通してわかったことも報告する。

2. 支援にあたって

コーディネータは、春学期に遠隔授業を経験し、遠隔授業実施に必要な基礎知識や ICT をひととおり身につけ、授業経験を通した気づきも多かった。学期中は必要以上の ICT の習得にこだわり、目先の ICT や遠隔授業に関する情報に振り回され、非常に疲弊した状態となっていた。授業運営では最終的には「自分が無理なくできること」「必要最低限の知識と技術」を用いて授業をする、ということに落ち着いた。慣れない操作や新しい ICT を取り入れ、授業が複雑化し停滞してしまうより、慣れていること、わかっていることを用いた指導の方がよりスムーズな授業運営となるということがわかった。ひとつの技術に慣れたら、次の新しい技術を習得する、というように、技術的な知識を、あわてず、慣れつつ身につけるようにしてストレスの軽減に努めた。

同時に、従来スタッフルームでの教職員との打ち合わせ、相談、情報共有などの機会が激減し、現場での対話の必要性を痛感していた。春学期は専任教員と頻繁に Zoom や LINE などのコミュニケーションツールを用いてできるだけ時間をおかずに問題を解決したり情報共有をしたりするよう心掛け、コミュニケーションをとることで互いの不安や心配を軽減させることができた。このような教室外での対話の場がいかに大切な場であるかを実感した。

コーディネータは、授業担当講師に対してもこうした授業運営のための「最低限の知識と技術の提供」および「対話の場の提供」をしたいと考えた。

3. 支援の実際

3.1 必要最低限の知識と技術の提供

「自分が無理なくできること」「必要最低限の知識と技術」を用いた授業運営のために、すでに授業担当講師が習得していること、これから習得しなければならないこと、知っていることや知らないことなどを対話を通して確認した。それぞれの ICT 習得状況に応じて取捨選択を行い「必要最低限の知識と技術の提供」を行った。また、学期を通じて、常に授業担当講師が消化不良にならないように、「与えすぎない」ことを心掛けた。学期中、遠隔授業に慣れてきたところで、新たな ICT を活用した指導法を提供し、「自分が無理なくできること」を少しずつ、そして着実に増やしていくよう心がけた。授業運営の支援は、それぞれの要望に応じて、直接本学内で行う支援と、Zoom や LINE などのコミュニケーションツールを用いて遠隔で行う支援があった。

次に、遠隔授業の経験のなかった授業担当講師に対する最低限の知識と技術の提供について具体的な例を述べる。学期前、同講師は提供した内容以外の様々な ICT の活用、遠隔授業のための新しい知識や情報を希望していたが、「自分が無理なくできること」を基準に安心して授業に臨めるように「必要最低限の知識と技術の提供」を行った。同講師は学内 LMS (Learning Management System) の利用経験がなかったが、コーディネータ自身が学内 LMS での課題のやり取りに手間取り、習得までに苦労したわりに少人数クラスではさほど利用しなかったという経験から、できないのなら今は無理に使う必要はないと伝えた。その代わりに、慣れているツールである学内メール、Word、添付ファイルでも十分対応できるとアドバイスした。学期が進み、遠隔授業に慣れてきたところで、テスト作成、実施手順など、新たな ICT を活用した指導法を提供した。

3.2 対話の場の提供

3.2.1 遠隔での対話

従来のスタッフルームでの対面での対話の代わりに、複数のコミュニケーションツールを用い、遠隔での対話の場を提供し、対話の機会を増やすように心がけた。

通常の授業報告や学生連絡など、急を要さないものは現行通りメールで対応した。コーディネータからは現行の授業報告や学生連絡などに加え、より詳細な学生の状況、授業スケジュール、学内連絡などをできるだけ多く発信し、情報共有に努めた。授業担当講師からも授業報告や学生連絡以外に、問い合わせや相談などが送られてきており、それぞれ個別に対応した。

授業中のトラブル、緊急 SOS など迅速な対応が求められる場合にはコミュニケーションツールを用いた。すぐに解決したいことや学生からの事務的な質問等、現行のスタッフルームで行っていたその場でのやりとりで問題解決をするという形に近い対話の場を提供した。このインターネット上での対話の場の提供は遠隔授業に切り替わってからはじまった新しい形の支援である。授業に支障はないか、学習者の様子はどうか等、コーディネータからもこれらのツールを通してたびたび声をかけた。

LINE やメールでの複数回の文字でのやり取りから Zoom や音声通話に切り替え、話すこともあった。授業運営や ICT の操作に関して、実際に会話をした方が早く解決する場合は、Zoom や音声通話を用いることが多かった。これは対面での支援に近い形であると言える。

3.2.2 対面での対話

学期開始前の打ち合わせや PC の技術的な操作など、遠隔でのやり取りでは十分に伝わらないことは、対面で対話をする場を提供した。

学期開始前の対面での打ち合わせでは、コーディネータが把握している学習者の状況やレベルについての情報を提供し、それぞれの担当科目に応じた授業計画のアドバイスを行った。コーディネータが対話の中から必要だと強く感じた点を中心に、授業担当教師の支援内容に優先順位をつけ、不安やストレスを解消するための問題解決につとめた。

実際の授業担当講師との学期前の打ち合わせでは、遠隔授業に関して困っていることや不安なことを聞き取り、さらに授業担当講師が遠隔授業のために必要なことの洗い出しを行った。対話の中から、同講師の遠隔授業に対する知識や技術が断片的なものであり、それらが実際の授業で使えるのか、どう使うのか、などについてはイメージできない状態であるということがわかった。授業の手順（ワークシートや課題の配布や回収方法）がわからないこと、学習者側の学習環境（使用端末、プリンターの有無）がわからないことなどから事前準備ができず、教案が書けない状態が不安だということも聞き取りからわかった。そこで、学習者の使用端末やプリンターの有無などの情報から、教材はできるだけ学期前にすべてのデータをまとめて送った方がいいこと、Word 文書のメールでの送付、回収はできるということなどを伝えた。

PC の技術的な操作など、遠隔でのやり取りでは十分に伝わらないことは対面で支援した。授業担当講師には PC 持参で学内まで足を運んでもらい、それぞれの PC を並べ、あるいは 2 部屋に分かれて、どのような操作でどのように動くのか、学習者の端末画面にどう

反映されるのか、実際に手を動かし、画面を目で見て確認、理解、習得できるような支援を行った。既に遠隔授業経験のあるコーディネータにとっては当たり前のことでも、未経験の同講師には初めて知ることや体験することも少なくないことから、相手の理解度に配慮しながら、説明する上での詳しさをわかりやすさや進度を調整した。実践の方が説明をするより早く、問題もその場で解決することができ、不安やストレスの軽減にもなったと思われる。

4. 授業担当講師の振り返り

学期開始当初、学内 LMS を使いこなしたいと思っていたが、コーディネータからの「最低限の知識と技術の提供」による支援に従い、シンプルな授業運営をすることでストレスを感じることなく、落ち着いて授業に臨むことができた。その後、徐々に ICT を習得し、対面で受けた支援の際の経験から、必要に応じて、自分自身で使えるツールを増やしていくことができた。最初は最低限の技術と知識で十分であった。

「対話の場の提供」に関する支援では、授業開始前の Zoom での打ち合わせや対面の対話から、授業をイメージすることができるようになり、適切なやり方や効果的な方法も理解できるようになった。その結果、不安が払しょくされ、落ち着いて授業に臨むことができた。さらに、学期中に生じた疑問や問題は、その都度相談して早期の問題解決につながった。いつでも相談できる環境があったことは授業担当講師にとって非常に心強かった。

5. まとめ

本実践では、コーディネータ自身の遠隔授業の経験をもとに、授業運営に必要な「最低限の知識と技術の提供」、および「対話の場の提供」による支援を行った。

具体的には、授業担当講師と双方向の密な対話を重ね、支援の内容や方法を検討し、適切なタイミングで技術や知識を提供した。さらに対話を通じて現状把握、情報提供、助言など、きめ細かい支援を行った。その結果、遠隔授業の経験が少ない授業担当講師が抱えていた様々な不安の解消や問題の解決につながった。

コーディネータは、管理運營業務に追われ、教師支援の時間を作るのが困難であることが多い。しかし、常に密な対話や積極的な講師へ声掛けなど、授業担当講師が声をあげやすい環境をつくり、授業担当講師の経験や知識量、技術の習熟度に応じた教師支援を提供することが望まれる。

(鈴木美穂すずきみほ・目白大学・m-suzuki@mejiro.ac.jp)

(鈴木秀明すずきひであき・目白大学・h.suzuki@mejiro.ac.jp)

(山口恵子やまぐちけいこ・目白大学・ke.yamaguchi@mejiro.ac.jp)